

思
い
出
す
人
々



西山 厚 全24回

第15回 【姉】

昔、嫁ぐ姉のために、家族全員でそれぞれに何かを書き、小冊子を作った。トッパバッターは父だった。

桃の夭夭 桃の夭夭たる

灼灼其華 灼灼たり其の華

之子于歸 之の子于き歸ぐ

宜其室家 其の室家に宜しからん

若々しい桃。その華は燃えるように美しい。そのように若々しく美しいこの子が嫁いでいく。嫁ぎ先でもきつと愛されることだろう。

『詩経』に収められた詩。紀元前に作られた古い詩。嫁ぐ娘を思う父親の気持ちは変わらない。父はこの詩を何度も口にしていたに違いない。そして、書いた。姉が生まれたのは、まだ日本中が貧しかった時期。初めての子に対する父の愛の深さは、父が残した日記や短歌から、受け止めきれないほど伝わってくる。父と母と幼い姉。「三人をれば世に恐ろしき物なし」と綴った父。生まれる前から姉は深く愛されていた。末っ子の私は、子どもの頃、姉にとてもかわいがってもらった。今も、そう。